

第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン
企画2 オラトリオ《メサイア》1741年初稿版全曲
演奏会批評 (小山晃氏)
『モーストリー・クラシック』
(産業経済新聞社)
2009年7月号 p.143

4月20日 浜崎宮朝日ホール

第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン2009 ヘンデル:オラトリオ「メサイア」

音楽

撮影:三澤徹



ヘンデル没後250年「ヴァーサリー」として演奏されたオラトリオ「メサイア」を聴いた。この作品のヴァージョンには、ヘンデル自身の改訂やモーツァルト編曲などの幾つかの版があるのだが、ヘンデル研究家の三澤寿喜指揮、キャノンズ・コンサート室内管弦楽団・合唱団の演奏は、1741年の作曲家初稿版によるもの。独唱者こそ4人だが、オケも合唱も大変質素な編成である。

従来、比較的大編成で聴いてきた耳には、当初はいささか寂しい感じもしたが、新鮮さもある。小編成ゆえむしろ演奏は綿密響きは清冽であり、合唱は透明感を保ち、独唱は明晰に浮き彫りにされた。

独唱はソプラ

ノ松村萌子、メゾソプラノ波多野睦美、テノール辻裕久、バス牧野正人と名手ぞろい、様式感の明確な三澤指揮に則し、余剰な感情移入なく、「救世主到来の預言」から「最後の審判と死者の復活、永遠の生命」まで、堅実に真摯に、歌われ語られていった。

小山晃◎音楽評論家